

出来事の同一性に関するデイヴィドソン説とクワイン説： 因果基準と時空基準

伊佐敷 隆弘

Davidson and Quine on the Identity of Events：
Causal Criterion and Spatio-temporal Criterion

Takahiro ISASHIKI

要 旨

出来事個体の同一性に関するデイヴィドソン説（因果基準）とクワイン説（時空基準）について検討する。因果基準は「同じ時空領域に複数の出来事が生じる可能性」を、時空基準は「4次元主義的存在論（出来事と物体の同一視）」を、それぞれ主な根拠としている。デイヴィドソンはクワインからの批判を受け、因果基準を捨て時空基準を採るに至った。しかし、どちらの基準も循環を含み、また因果基準はデイヴィドソンの単称因果言明分析と相性が悪く、時空基準はデイヴィドソンの非法則的一元論と相性が悪い。それゆえ、デイヴィドソンの転向は早計過ぎた。彼は他の可能性を探るべきだった。

目 次

はじめに

1. デイヴィドソンの因果基準
 - (1) 「同一原因結果」基準の提案
 - (2) 因果基準のメリット
2. クワインの時空基準
 - (1) 「同一時空領域」基準の提案
 - (2) 4次元主義的存在論（出来事と物体の同一視）
3. 微妙なケース
4. 時空基準への批判
 - (1) 出来事の位置の曖昧さ
 - (2) 同じ時空領域を複数の出来事が占める可能性
5. 因果基準への批判
 - (1) クワインによる「循環」批判

- (2) 「因果基準の循環」の意味
 - 6. デイヴィドソンの転向
 - (1) 時空基準批判に対するクワインの答弁
 - (2) 単称因果言明の分析と因果基準
 - (3) 数えることと同一性基準との切り離し
 - (4) 4次元主義的存在論の拒否
 - 7. 転向の是非
 - (1) 時空基準の循環
 - (2) 非法則的一元論と時空基準
- おわりに

はじめに

デイヴィドソン (Donald Davidson, 1917~2003) は、「日常言語における副詞除去推論を1階述語論理の範囲内で妥当な推論として処理すること」および「行為の再記述を可能にすること」を主な理由として、「個体としての出来事 (event as particular)」の存在を主張した¹⁾。そして、クワイン (Willard Van Orman Quine, 1908~2000) の「同一性なければ存在者なし (There is no entity without identity.)」という原則²⁾に従い³⁾、出来事個体の同一性の基準を与えた。即ち、「同じ原因と結果を持つ出来事は同一である」という基準である。他方、クワインは「同じ時空領域を占める出来事は同一である」という基準を提案し、デイヴィドソンの基準を批判した。デイヴィドソンはクワインからの批判を受け、彼の基準 (因果基準) を放棄し、クワインの基準 (時空基準) を採用するに至る。本論文においては、因果基準と時空基準のそれぞれがどのような根拠に基づいて主張されたのか (1節, 2節), そして互いにどのような批判をおこなったのか (4節, 5節) を明らかにし, さらに, デイヴィドソンの転向の是非について検討する (6節, 7節)。

1. デイヴィドソンの因果基準

(1) 「同一原因結果」基準の提案

デイヴィドソンは出来事個体の同一性の基準について次のような提案をする⁴⁾。(なお, 以下においては「出来事個体」を「出来事」と略記する。)

「出来事が同一であるのは, それらが全く同じ原因と結果を持つ場合 (だけ) である。

(events are identical if and only if they have exactly the same causes and effects.)」

また, 彼はこれを1階述語論理の表記法を用いて, 次のような論理式で表す。

$$(x=y) \text{ if and only if } ((z)(z \text{ caused } x \leftrightarrow z \text{ caused } y) \text{ and } (z)(x \text{ caused } z \leftrightarrow y \text{ caused } z))$$

この論理式において「x」「y」「z」は個体変項であり, いずれも出来事を指示する単称名辞 (singular terms referring to events)⁵⁾に置き換えることができる。出来事を指示する単称名辞の具体例としてデイヴィドソンが挙げる⁶⁾のは「サリーの3歳の誕生パーティ」「1906年に

おけるヴェスビオス火山の噴火」「私が今朝朝食を食べたこと」「シカゴにおける『ルル』の最初の上演」、「スコットの死」と『『ウェイヴァリー』の著者の死」、「私による毒の混入」と「(それによる)飛行士の死」、「或る金属球が温まること」と「その金属球が35度回転すること」などの記述 (description) や「あの悲鳴」「あのポタポタたれる音」「次の衝撃波音」などの指示詞による指示 (demonstrative reference) である。これらの他に固有名で出来事が指示されることもありうる。(デイヴィドソンが挙げる例ではないが、例えば「フランス革命」など。)

「if and only if (のとき、かつそのときに限って)」の左辺の「 $(x=y)$ 」は「単称名辞 x によって指示される出来事と単称名辞 y によって指示される出来事とは同一の出来事である」ということを意味し⁷⁾、右辺はそのための「必要十分条件⁸⁾」を与える。結局、デイヴィドソンの言う「出来事の同一性の基準」とは「異なる単称名辞で指示される出来事が同一であるための必要十分条件」のことである。

また、右辺は「and」で結ばれた2つの部分からなるが、「and」の左側は「原因の同一性」を、右側は「結果の同一性」を述べている。まず原因の同一性を表す部分から見てみよう。「 (z) 」は「いかなる出来事 z についても」と読むから、「and」の左側の「 $(z)(z \text{ caused } x \leftrightarrow z \text{ caused } y)$ 」は「いかなる出来事 z についても、もし出来事 z が出来事 x を引き起こすなら、出来事 z は出来事 y をも引き起こすし、逆に、もし出来事 z が出来事 y を引き起こすなら、出来事 z は出来事 x をも引き起こす」と読む。即ち、出来事 x の原因と出来事 y の原因とがまったく共通であるということ述べている。

これは具体的にはどのようなことだろうか。デイヴィドソンを離れて具体例を考えてみよう。一つの出来事の原因はしばしば複数存在する。例えば、このコップが床におつかって割れたことの原因は、私がおつかってコップをテーブルの端に置いたことであるし、また、私の飼い猫がテーブルに飛び乗ったことでもある。これらのどちらか一方が欠けてもこのコップは割れなかっただろう。他方、私の赤ん坊が泣き出したことの原因は、私の飼い猫がテーブルに飛び乗ったことであり、かつ、テーブルのそばの椅子で眠っていた赤ん坊がちょうどそのとき眠りから覚めたことである。(目覚めたとき、目の前に猫が突然現れたために泣き出したのだ。)このように、「このコップが割れたこと」と「私の赤ん坊が泣き出したこと」とは、「私の飼い猫がテーブルに飛び乗った」という共通な原因の一つ持っている。しかし、すべての原因を共有しているわけではないから、同一の出来事ではない、ということになる。

また、右辺の「and」の右側の「結果の同一性」を述べる部分についても同様のことが言える。

これに対し、異なる単称名辞によって指示されている出来事の原因と結果が完全に一致しているならば、それらは同一の出来事だということになる。デイヴィドソンの挙げる例だが、私がタンクに毒薬を混入して宇宙飛行士を殺害した場合、私は「タンクへの毒薬の混入」と「宇宙飛行士の殺害」という二つの行為をしたのではなく、(二通りに記述されている)一つの行為をしたのである⁹⁾。なぜなら、これら二つの記述によって指示されている行為の原因と結果がまったく共通だからである。また、行為以外の出来事の場合も同様である。例えば、「村で先週起こった惨事」が「村で先週起こった雪崩」というふうに再記述されることがある¹⁰⁾が、それはこれら二つの記述を持つ出来事の原因と結果がまったく共通であり、それゆえ、それらの記述は同一の出来事を指示するからである。

要するに、デイヴィドソンによれば、異なる出来事がすべての原因と結果を共有することはありえない。即ち、「[物質的] 対象が諸対象からなる空間的枠組み (spatial framework of objects) の中で一意的な位置 (unique position) を占めているのと幾分似た仕方では、出来事は出来事間の因果関係の枠組み (framework of causal relations between events) の中で一意的な位置を占めている¹¹⁾」のである。

(2)因果基準のメリット

デイヴィドソンがこのような因果基準を採る最大の理由は、因果基準の他に適切な基準が見当たらない、即ち、「出来事の同一性を確立するために常に十分であるような条件」が他にない¹²⁾、ということである。しかし、彼は因果基準のメリットとしてさらに次の2点を挙げている。

一つは、「この基準が正しければ、我々がなぜあれほどしばしば原因や結果によって出来事を同定したり記述したりするのか、そのわけが理解しやすくなる¹³⁾」ということである。出来事をその原因や結果を用いて記述する例としてデイヴィドソンが挙げるのは「私によるその被害者の殺害は、被害者の死という結果を持つ行為でなければならない。[...] マットの上面に猫がいるのを私が見たとしたら、私による猫の目撃は猫がマットの上にいるということによって引き起こされなければならない¹⁴⁾」というものである。つまり、殺害という行為それ自体は、つづめてしまえば、(例えば)「銃の引き金を人差し指で引く」という身体動作であるが、「ジョンの死」という出来事がこの動作の結果生じた場合、この身体動作は「ジョンの殺害」というふうに同定・記述されることになる。つまり、この場合、結果によって行為が同定・記述されている。他方、「私によるマット上の猫の知覚」という出来事は「マット上に猫がいる」という出来事をその原因として引き起こされたのだ、という暗黙の前提のもとで我々は「マットの上に猫がいるのを私は見た」という文を理解している。つまり、私の知覚はその原因によって同定・記述されている。だから、猫がいなくてもかかわらず、私が「マットの上に猫が見える」と言った場合、私の発言は不適切なものだと思われ、私は幻覚か何かを見たのだと解釈されることになるだろう。これらの場合のように、出来事がその原因や結果によって同定・記述されることがしばしば行われるのは、原因結果の同一性が出来事の同一性の基準だからだ、とデイヴィドソンは主張したいのである。

また、因果基準のもう一つのメリットとしてデイヴィドソンが挙げる¹⁵⁾のは、「心的出来事と物的出来事の同一性を主張するためには因果基準の方が時空基準よりも優れている」ということである。即ち、「痛みの知覚」と「生理学的変化」との同一性を主張するための最もよい証拠は「両者が同一の原因と結果を持つこと」である。「このような場合、原因と結果の同一性〔因果基準〕は、場所と時間の同一性〔時空基準〕よりも、はるかに役に立つ基準である」とデイヴィドソンは主張している。(この論点については本論文第7節(2)「非法則的一元論と時空基準」で詳しく検討する。)

以上がデイヴィドソンの提案した因果基準である。

2. クワインの時空基準

(1) 「同一時空領域」基準の提案

クワインはデイヴィッドソンの因果基準を批判し、それに替えて、「同一時空領域基準」を提案する。即ち、次のような基準である。

「物理的対象 (physical object) とは, [...] 時空間の任意の部分の物質的内容 (material content of any portion of space-time) のことである。その部分は、いかに大きかろうと、小さかろうと、また、不規則であろうと、不連続であろうと構わない。[...] 出来事とはこの意味での物理的対象である。[...] 物理的対象は [...] 時空的に同じ広がりを持つ (spatiotemporally coextensive) ときに、かつそのときに限り、同一である¹⁶⁾。」

要するに、同じ時間に同じ空間を占めていることが同一の出来事であるための必要十分条件である。したがって、クワインのこの基準によれば、同じ空間に同時に複数の出来事が生じることはありえない。例えば、或る男が口笛を吹きながらバス停まで歩いた場合、「或る男による口笛吹き」という出来事と「或る男によるバス停までの歩行」という出来事とは、時空的に同じ広がりを持つから同一の出来事だということになる¹⁷⁾。

(2) 4次元主義的存在論 (出来事と物体の同一視)

クワインの時空基準の背景には彼の存在論がある。クワインの存在論は「出来事」と「物体 (body)」を同一視し両者とも「時空間内に広がる連続体」であるとする4次元の見方 (four-dimensional view) である。彼の4次元主義的存在論は以下の議論によって導かれている。

クワインは日常言語を1階述語論理で扱える文に書き換える。(これを彼は「規格化 (regimentation)」或いは「正準形 (canonical form) への変形」と呼ぶ。) 日常言語における妥当な推論を処理する理論をできるだけ単純に保ちたい (即ち、1階述語論理の範囲内で処理したい) ということがこの書き換えの動機である¹⁸⁾。この書き換えにおいて、動詞の時制は「無時制の動詞+副詞」によって書き換えられる¹⁹⁾。

例えば、次のような推論をしたとしよう。

彼らのうちの7人がとどまった。(Seven of them remained.)①

7は奇数である。(Seven is an odd number.)②

したがって、彼らのうちの奇数人が留まった。

(An odd number of them remained.)③

これは妥当な推論である。しかし、一見これと同じ構造を持つように思われる次の推論は妥当ではない。

ジョージはメアリーと結婚した。(George married Mary.)④

メアリーは未亡人である。(Mary is a widow.)⑤

したがって、ジョージは未亡人と結婚した。(George married a widow.)⑥

ジョージが死んだためにメアリーは未亡人になったのだから、この推論は妥当ではない。(これに対し、もし⑤が「メアリーは未亡人だった」なら、この推論は妥当である可能性がある。)

②の「である (is)」が無時間的 (timeless) であるのに対し、⑤の「である」は時間的である。両者の違いをはっきりさせるために、動詞をすべて無時制にした上で、時間的情報は

(必要に応じて) 副詞句で表現することにする。例えば、未来形の動詞は「無時制の動詞+今後 (after now)」と書き換える。すると、上の①②③と同じ構造を持つのは④⑤⑥ではなく、次の⑦⑧⑨である。(⑦⑧⑨は正準形で書かれており、そこに現れる動詞はすべて無時制である。無時制であることを示すためにカタカナで表記しよう。)

ジョージは今より前にメアリーと結婚スル。

(George marries before now Mary.)⑦

メアリーは今未亡人デアル。(Mary is a widow now.)⑧

したがって、ジョージは今未亡人(デアル人)と今より前に結婚スル。

(George marries before now (one who is) a widow now.)⑨

この推論は①②③と同様に妥当である。クワインはこのように言う。

そして、クワインに言わせると「今より後」「今より前」という表現は「ここから西 (west of here)」と似ており、結局、正準形の文は「時間を空間と同等に扱う」のであり、その結果、「物理的対象は、このように、時空間 (space-time) において 4 次元的に (four-dimensionally) 見られることによって、出来事から区別することができなくなる²⁰⁾」のである。つまり、クワインによれば、私に今見えている眼前の机は一つの個体ではなく、個体の時間的部分にすぎない。机という個体はその誕生から消滅までの時間にそれに生じる歴史の全体のことであり 4 次元の時空連続体である。こうして、上述の「物理的対象」の定義(即ち「時空間の任意の部分の物質的内容」)にクワインは至る。

クワインが 4 次元主義的存在論を採ることの一番の理由は、以上のように「規格化によって、日常言語における妥当な推論を 1 階述語論理の範囲内で処理できるようにすること」であるが、その他にクワインはこの存在論のメリットとして次の 6 点を挙げている²¹⁾。

- (i) 相対性理論も時間を空間的に扱っている。
- (ii) ヘラクレイトスの川の問題が解決できる。
- (iii) 人格の同一性の問題が解決できる。
- (iv) ゼノンのパラドックスが解決できる。
- (v) もはや存在しない何かについて述定することを理解可能にする。
- (vi) 同時に存在したことがない対象を量化したり、一つの集合にまとめたりすることを理解可能にする。

(i)に関してはニュートン・スミスの批判²²⁾があるが、(ii)~(vi)に関しても筆者は強い疑いを持っている。しかし、4 次元主義的存在論の評価については別の機会に譲ろう。

結局、クワインの時空基準は次のような推論から導かれていると考えられる。

物体も出来事も物理的対象(時空間内の 4 次元連続体)である。

物理的対象の同一性の基準は同一時空領域を占めることである。

したがって、物理的対象の一種である出来事の同一性の基準も同一時空領域を占めることである。

このように、クワインの場合、まず 4 次元主義的存在論²³⁾が先にあって、その系として「出来事の同一時空領域基準」が出て来ている。そして、クワインによれば、時空基準によって「物理的対象は明確に個体化 (well individuate) されている」から「出来事を物理的対象に同化させることによって、出来事の同一性の問題は解消する²⁴⁾」のである。

3. 微妙なケース

因果基準と時空基準のいずれを採るかによって、「一つの出来事が生じているのか、それとも、複数の出来事が生じているのか」に関する判断が分かれる場合がある。そのような微妙なケースとして少なくとも次の3通りがある²⁵⁾。

- (a) 私がタンクに毒薬を混入して宇宙飛行士を殺害する。
- (b) 或る男が口笛を吹きながらバス停まで歩く。
- (c) 或る金属球が35度回転しつつ温かくなる。

因果基準によれば、(a)における「私による毒薬の混入」と「私による宇宙飛行士の殺害」が一つの出来事を二つの仕方でも記述しているのに対し、(b)の「或る男による口笛吹き」と「或る男によるバス停までの歩行」とは異なる出来事である。また、(c)の「或る金属球の回転」と「或る金属球の温度上昇」も異なる出来事である。(a)の場合、「私による毒薬の混入」も「私による宇宙飛行士の殺害」も「宇宙飛行士の死」という同一の結果をもたらすし、また、私は「毒薬を混入する」ことによって「宇宙飛行士を殺害する」のであって、殺害のために毒薬混入とは別の行為が必要なのではないからここには一つの出来事しか生じていない。他方、(b)の「バス停到着」という結果が生じたのは「バス停までの歩行」の結果であって「口笛吹き」の結果ではないから、「或る男によるバス停までの歩行」と「或る男による口笛吹き」の引き起こした結果は一致していない。同様に、(c)の「金属球の温度上昇」は結果として「周囲の空気の温度上昇」をもたらすが、「金属球の回転」はそのような結果をもたらさない。それゆえ、(b)(c)の場合、それぞれ複数の出来事が生じている。

これに対し、時空基準によれば、(a)(b)(c)いずれの場合も、それぞれ一つの出来事しか生じていない。なぜなら、いずれの場合も、そこで記述されている出来事は同一の時空領域を占めているからである。例えば、(b)の「或る男による口笛吹き」と「或る男によるバス停までの歩行」とは同じ時空領域（即ち、この男の身体がこの時間に通過した空間の合計）を占めている。また、(c)の場合も同様に、「或る金属球の回転」と「或る金属球の温度上昇」とはまったく同一の時空領域（即ち、球がその時間に存在している場所）を占めている。

このように、因果基準と時空基準のどちらを採るかによって、「一つの出来事を複数の仕方でも記述している」と見るか、それとも、「複数の出来事が生じている」と見るべきか、判断が分かれるケースがあるのである。

4. 時空基準への批判

デイヴィッドソンは因果基準を採る際に時空基準について検討しそれを退けている。退ける理由は二つある。即ち、「出来事の位置 (the location of an event) の適切な基準を我々が持っていないということ」および「同じ時空領域に二つの異なる出来事が生じると考えられること」の二つである。ただし、これら二つの内、デイヴィッドソンが強調するのは後者の方である。

時空基準はクワインによる因果基準批判²⁶⁾以前にレモンが提案しており²⁷⁾、デイヴィッドソンの時空基準批判はまずレモンへの回答として述べられている。

(1)出来事の位置の曖昧さ

出来事の位置が問題になるケースとして次の3つの例をデイヴィドソンは挙げる²⁸⁾。

- (i) まず、「腕が上がるという出来事」と「腕を挙げるという行為（出来事）」の同一性を巡る問題である。或る男の腕が上がる時、この出来事はその腕が占めている時空間において生じている。他方、或る男が自分の腕を挙げる時、その行為（出来事）はその男全体が占めている時空間において生じている。とすれば、これらの出来事が占めている時空領域は一致していないから、時空基準によれば、これらは別々の出来事だということになる。しかし、これは我々の直観に反する。
- (ii) 第2の例は、「車をガレージに入れるという行為が生じている場所はどこか」という問題である。車が通過した空間だけなのか、それともガレージ全体なのか。
- (iii) 第3の例は、「部分の変化（という出来事）が生じる場所はどこか」という問題である。仮に次の推論が正しいとすると「あらゆる変化は同じ場所で生じている」ということが帰結する。

対象の変化が生じている場所は、少なくともその対象が占める場所を含む。……………⑩
 或る対象が他の対象の部分である場合、前者の変化は後者の変化でもある。……………⑪
 しかるに、いかなる対象も宇宙の部分であるから、対象の変化が生じている場所は宇宙全体である。（換言すれば、あらゆる変化は宇宙全体という同じ場所で生じている。）……………⑫
 つまり、対象は宇宙の部分だから（⑪より）対象の変化は宇宙の変化でもある。すると（⑩より）宇宙の変化が生じている場所は宇宙が占める場所即ち宇宙全体である。したがって、結局、対象の変化が生じている場所は宇宙全体だということになる。即ち、どんな対象の変化も同じ場所（宇宙全体）で生じているということになる。

デイヴィドソンは、以上の3つの例により、「我々は出来事の位置に関する適切な基準を持っていないから、時空基準は出来事の同一性の基準としてふさわしくない」と言いたいのである。

しかしながら、この問題についてデイヴィドソンは別の論文²⁹⁾の中で自ら答えている。

「山」という物質的対象の位置がその頂上の緯度と経度によって一意的に与えられるように、「爆発」という出来事の位置もその爆心地の位置によって一意的に与えられる。また、「思い出す」とか「決意する」とかの心的出来事についても、それらの出来事は「思い出した人」「決意した人」のいる場所で生じたのである。デイヴィドソンは「痛みのようないくつかの疑わしいケースを別にすれば、人を同定する以上の正確さで心的出来事を位置づけるべき理由はない」と言う。つまり、境界が曖昧であることは位置が曖昧であることを意味しないということである。したがって、上の(i)と(ii)の例の場合、「腕を挙げている人」「車をガレージに入れている人」の位置を確定できればそこで生じている出来事の位置の特定としては十分だということになる³⁰⁾。

また、(iii)の推論について、デイヴィドソンはその妥当性を否定する。即ち、「『或る出来事が或る実体の変化である場合、その出来事の位置はその実体が占めている空間全体である』という仮定が間違っている。むしろ、その出来事の位置は〔…〕実体の変化が生じている最小部分の位置である」と言う。つまり、上の⑫は真だが⑩は偽である。対象の変化が生じている場所は、その対象が占める場所の全体を含むとは限らない。その場所の内では変化が生じている部分だけを含むと考えるべきである。したがって、（⑫は真だから）いかなる対象の変化も宇宙の変化ではあるが、宇宙の変化という出来事が生じている場所は宇宙全体ではなく、たかだかそ

の対象が占めている空間である。それゆえ、「すべての出来事が同じ位置を持つ」というナンセンスな帰結 (12) は回避できる。デイヴィドソンはこのように考えている。

このように見てくると、デイヴィドソンは「出来事の位置の適切な基準を我々が持っていない」ということは時空基準にとって致命的な問題ではないと見なしているようである。(ただし、この論点については本論文第6節(3)「数えることと同一性基準との切り離し」および第7節(2)「非法則的一元論と時空基準」において再度検討する。)

(2) 同じ時空領域を複数の出来事が占める可能性

デイヴィドソンが時空基準を退ける第2のそして主たる理由は、同じ時空領域に二つの異なる出来事が生じていると考えるべきケースがあるということである³¹⁾。デイヴィドソンが挙げるのは、「まったく同じ時間に、ジョーンズが風邪を引き、ヘレスポント海峡を泳ぎ、自分の恵まれた面について考える」ケースである。これは本論文第3節(b)の「或る男が口笛を吹きながらバス停まで歩く」というケースと本質的には同じである。これらのケースにおいて、複数の出来事が生じていると見るべきだとデイヴィドソンは考えている。

また、行為以外の出来事の場合についても同様のケースがある。即ち、本論文第3節(c)の「或る金属球が自転しつつ温かくなる」というケースである。デイヴィドソンは言う。

「二つの異なる変化が同じ時間に一つの実体の全体にわたって生じうると言うことは自然である。例えば、或る金属球が数分の間に温かくなり、かつ、同じ時間に35度回転した場合、この二つの変化は同じ出来事であると言わねばならないだろうか。言うべきではないだろう³²⁾。」

ジョーンズの例にしても金属球の例にしても、同じ時空領域に複数の出来事が生じているのであり、これらの場合に一つの出来事しか認めえない時空基準を採ることはできない。このようにデイヴィドソンは考えているのである。

5. 因果基準への批判

(1) クワインによる「循環」批判

デイヴィドソンの提案する因果基準に対して、クワインは、「この基準は出来事を量化することによって出来事を個体化しようとしている」が故に「循環」しており、「非述語的 (impredicative) な個体化」であると言って批判する³³⁾。

「非述語的」というのはもともとは定義について言われる形容であり、「非述語的定義」とは「定義されるべきもの (被定義項) を含む全体に訴えることによって、被定義項を定義すること」である。したがって、「非述語的な個体化」とは「個体化されるべきもの (ここでは出来事) を含む全体に訴えることによって、或るもの (出来事) を個体化すること」だということになる。非述語的定義は、いわゆる「ラッセルのパラドックス³⁴⁾」を回避するために、ポアンカレおよびラッセルによって禁止された定義である。

デイヴィドソンの因果基準を表す論理式をもう一度下に書こう。

$$(x=y) \text{ if and only if } ((z)(z \text{ caused } x \leftrightarrow z \text{ caused } y) \text{ and } (z)(x \text{ caused } z \leftrightarrow z \text{ caused } z))$$

これを見ると確かに出来事の同一性の必要十分条件を与える右辺に「(z)」即ち「すべての出

来事zについて」が現れている。つまり、出来事全体へ訴えることによって、出来事xと出来事yの同一性が与えられていることになる。出来事全体の内には出来事xや出来事yも含まれているから、この個体化は確かに「非述語的な個体化」である。

しかし、クワインは「私は非述語的定義を許容する。[...] 非述語的に定義 (define) することはできるが、非述語的に個体化 (individuate) することはできない」と言って、非述語的定義を容認しつつ非述語的個体化を拒否する。クワインによると、或る人を、その人自身も含むイェール大出身者全員の測定値を平均することによって、「典型的イェール大出身者」として同定する場合、そこにまったく問題はない³⁵⁾。「……は典型的イェール大出身者だ」という性質は「……は、ほとんどのイェール大出身者の持つ性質を持っている」という性質であり、その定義は典型的イェール大出身者を含む全体（即ちイェール大出身者全員）に訴えることによって行われる。したがって、これは非述語的定義である。しかし、この定義は無害であろう。これに対し、非述語的に個体化することは不可能である。クワインはこのように主張する。しかし、非述語的定義が容認されるのに、なぜ非述語的個体化が容認されないのか、その根拠をクワインは明示的に述べていない。

また、論理式の右辺では確かに「(z) 即ち「すべての出来事」が現れているが、この出来事zは出来事xや出来事yの「原因」や「結果」であるから、「 $z \neq x$ 」「 $z \neq y$ 」であると考えた方がよい。つまり、右辺の「すべての出来事」を「出来事xや出来事y以外のすべての出来事」と書き換えてもこの基準の実質的な内容は変わらないであろう³⁶⁾。そして、その場合、この基準はもはや「非述語的個体化」とは言えまい。

要するに、クワインによる「循環」の説明は形式的過ぎるのである。そこで、他の論者による同様の趣旨の批判を取り上げ、「因果基準の循環」の意味を明らかにしよう。

(2) 「因果基準の循環」の意味

ロンバードによると、因果基準の「循環」とは次のような事態のことである。

「循環だという批判にはいくつかの種類がある。その一つのバージョンは次のようなものである。出来事eと出来事e'が同一であるのは、因果基準によれば、eの原因がe'の原因でもある場合だけである。しかし、eの原因やe'の原因もまた出来事であるから、eの原因がe'の原因でもあるのは、因果基準によれば、それらの結果が同一の場合だけである。しかし、それらの結果の中には、それぞれ、eとe'が含まれている。それゆえ、我々は出発点に戻ってしまった³⁷⁾。」

即ち、次のような循環が生じている。出来事cが出来事eの原因であり、出来事c'が出来事e'の原因であるとしよう³⁸⁾。因果基準によれば、次の⑬と⑭が成り立つ。

e=e'であるのは、それらの原因が同一の場合だけ、即ち、c=c'の場合だけである。……⑬

c=c'であるのは、それらの結果が同一の場合だけ、即ち、e=e'の場合だけである。……⑭

したがって、e=e'であるのは、e=e'の場合だけである。……⑮

⑮はトリヴィアルに真であるが、トートロジーであるが故に同一性の基準としてはまったく無内容である。デイヴィッドソンの因果基準はこのような意味で循環する。

或いは、次のような言い方もできる。上の例において、e=e'であるのは、それらの原因であるcとc'が同一である場合だけであるが、c=c'であるのは、さらに、cの原因dとc'の原因d'が同一である場合だけである。さらに、d=d'であるのは、それらの原因の……（以下無限

に続く)。こうして因果基準は出来事が同一であるための必要十分条件を与えることに失敗する³⁹⁾。

クワインの「循環」批判もその内実はこのようなものであったと思われる。

6. デイヴィドソンの転向

(1)時空基準批判に対するクワインの答弁

クワインは因果基準を批判するだけでなく時空基準に向けられたデイヴィドソンからの批判に対して答えている。本論文第4節で述べたように、デイヴィドソンの主な批判点は「同じ時空領域に二つの異なる出来事が生じると考えられること」であった。この批判にクワイン⁴⁰⁾は次のように答えている。

セバスチャンがガムを噛みながらボローニャを歩き回った場合、「セバスチャンのガム噛み」という出来事と「セバスチャンの歩行」という出来事とは、同じ時空領域を占めているから、全く同一の出来事である。また、回転しながら温まった金属球の場合も、「その球の回転」という出来事と「その球の温度上昇」という出来事とは全く同一の出来事である。これらのことはクワインの時空基準からただちに出てくる。

さらに、クワインは、出来事間の因果関係について次のように主張する。「セバスチャンのガム噛みが、彼をしてボローニャを横断させた (Sebastian's gum-chewing got him across Bologna.)」と言ってよいし、「この球の回転が周囲の温度を上昇させた」と言ってよい。このような同一視は、風変わりかもしれないが、科学にとってまったく無害である。なぜなら、この同一視は「温度上昇一般と回転一般の間に (between warming and rotation in general), 或いは、移動とガム噛み [一般] の間に、因果的結合があるということを含意しているわけではない」からである。移動とガム噛みとの一般的な区別は依然として存在する。なぜなら、人々は時に一方なしで他方を行うからである⁴¹⁾。クワインはこのように言う。要するに、「時空領域に二つの異なる出来事が生じる」可能性を認める必要はないというのがクワインの答弁である。

(2)単称因果言明の分析と因果基準

クワインからのこの答弁と (本論文第5節で述べた)「循環」批判を受けて、デイヴィドソンは自らの因果基準を放棄し、クワインの時空基準を採用するに至る。

「クワインは私のもとの提案 [因果基準] のどこがよくないのかを明らかにしてくれた。私はここでもとの提案を放棄する。[...] クワインの基準 [時空基準]の方がすっきり (neater) しており優れている。というのはクワインの基準はそれを支えるための科学理論を必要としないからだ⁴²⁾。」

もともとデイヴィドソンは因果基準を主張する際、時空基準についても「出来事の同一性を確立するために常に十分であるようなもう一つの条件かもしれない⁴³⁾」と言って両方の基準を採用する可能性に言及してはいた。しかし、クワインからの批判を受けると、もはや両方を認めるのではなく、自らが提案した因果基準を捨て今まで批判していた時空基準を採ると言うのである。クワインに対する全面的な敗北宣言と言ってよい。デイヴィドソンは本節(1)のクワインの答弁を受け入れて、「球の回転とその温度上昇とは、両者が球を構成する粒子のその期間の

来歴と同一であることをはっきり理解すれば、両者を同一視してもさしつかえない」と言うに至る。「球の回転」と「球の温度上昇」とは同一の出来事だと言うのである。

しかし、先に本論文第3節「微妙なケース」で述べたように、「(b)或る男が口笛を吹きながらバス停まで歩く」という出来事や「(c)或る金属球が35度回転しつつ温かくなる」という出来事の場合、そこにおいて「引き起こされている結果が違う」がゆえに「同じ時空領域に二つの異なる出来事が生じている」とされたのではなかったのか。即ち、バス停到着という結果が生じたのはバス停までの歩行の結果であって口笛吹きの結果ではなく、同様に、周囲の空気の温度上昇は球の温度上昇の結果であって球の回転の結果ではないのではなかったか。このような「引き起こされている結果の違い」もデイヴィドソンは放棄するのか。

実は、デイヴィドソンの単称因果言明に関する分析を前提すると、もともとこれらのケースにおいて「結果の違いが存在する」ことは必ずしも自明ではないのである。言い直せば、本節(1)のクワインの答弁を否定することはデイヴィドソンにとってもともと容易ではなかったのである。

因果について論じる際、デイヴィドソンは「出来事それ自体」と「出来事の記述」との区別を強調する。

「このマッチを擦ったことが発火の原因の一部にすぎないということはありません。なぜなら、このマッチは事実、乾燥していたし、十分な酸素があったし、その擦りは十分強かったからだ。『このマッチに火がついたことの原因はこのマッチを擦ったことだ』という文において部分的なのは、〔原因それ自体ではなく〕原因の記述なのである⁴¹⁾。」

つまり、特定の場面における特定の出来事の原因は同じく特定の出来事なのであり、後者の出来事の記述がたとえ部分的であろうと、後者の出来事それ自体は前者の原因として十分なのだとデイヴィドソンは主張するのである。

この区別を踏まえ、さらに、デイヴィドソンは、「『或る出来事が他の出来事を引き起こした』ということ述べている言明〔単称因果言明〕が真であるか否かという問題と、『その関係は因果的である』ということ法則ないし他の因果知から演繹などによって推論できるような仕方その出来事の特徴が述べられているか否かという問題とは明確に区別されなければならない⁴²⁾」と言う。或いは、一層はっきりと、「因果性と同一性とは個別的出来事間の関係であり、それらの出来事がどのように記述されるかには拠らない⁴³⁾」と言う。要するに、出来事がどのように記述されているかということ、単称因果言明の真偽とは無関係だということである。

しかしながら、このような分析を前提すると、上述の「この球の回転が周囲の温度を上昇させた」という単称因果言明が真であるというクワインの主張をデイヴィドソンが否定するのは困難になる。というのは、もしクワインが言うように、「この球の回転」と「この球の温度上昇」とが同一の出来事であるなら、(デイヴィドソンの因果言明分析によれば)「この球の回転が周囲の温度を上昇させた」という単称因果言明(α)と「この球の温度上昇が周囲の温度を上昇させた」という単称因果言明(β)はまったく同一の因果関係を述べていることになる。それゆえ両者(α と β)の真理値は一致しなければならなくなり、 β が真なら α も真である。仮に、デイヴィドソンと違って、「出来事」のみならず「出来事の特徴」も原因や結果として認める⁴⁴⁾なら、(言い直せば、出来事の記述のされ方が単称因果言明の真偽を左右するとするなら、)たとえこれらの出来事が同一の出来事であろうと、これら二つの単称因果言明(α と β)

が異なる真理値を持つことは可能である。しかし、デイヴィドソンの場合は、「この球の回転が周囲の温度を上昇させた」という単称因果言明(α)が偽であるためには、これらの出来事は異なる出来事でなければならない。しかし、デイヴィドソンの因果基準によれば、出来事の同一性は原因結果の同一性に依存するのだから、これらの出来事の同一性を否定するためにはこの単称因果言明(α)が偽であることが必要となる⁴⁸⁾。これは循環である⁴⁹⁾。こうして、デイヴィドソンの単称因果言明分析を前提すると、上述の「微妙なケース」(b)(c)のいずれについても、そこに「複数の出来事が生じている」とする根拠を彼は挙げることができなくなる。

一方、クワインの時空基準の場合、因果分析とのこのような入り組んだ関係は存在しない。それゆえ、デイヴィドソンは「クワインの基準は、それを支えるための科学理論を必要としないがゆえに、[私の基準より] すっきりしており優れている」と言うのである。

要するに、デイヴィドソンの単称因果言明分析と出来事の同一性に関する彼の因果基準とは相性がよくない。デイヴィドソンの因果基準はこのような弱点をもともと抱えていたのである。この弱点のゆえに彼はクワインからの批判を防御し切れなかったのであろう。

(3)数えることと同一性基準との切り離し

デイヴィドソンは、自分がかつて時空基準を拒否した理由は二つあったと言う⁵⁰⁾。一つは、「同じ時空領域に二つの異なる出来事が生じると考えられること」であり、もう一つは「出来事の位置の曖昧さ」である。しかし、後者については、本論文第4節(1)で論じたように、クワインからの批判を待つまでもなく、彼はそれを時空基準への批判としては致命的でないと思っていた。にもかかわらず、この点に再び言及するのはなぜなのか。デイヴィドソンのことを引こう。

「クワインは『山の位置が、その境界が曖昧なまま、頂上の位置によって決まると同じように、爆発の位置はその中心によって決まる』と言う。このことは私も既に述べていた⁵¹⁾。しかし、クワインはさらに次のことを強調する。即ち、通常の種類の対象〔物体〕や出来事の時空的境界が曖昧であることは彼の個体化の原理〔時空基準〕の明確さを損なわないということである。クワインの言っていることは正しい。[...]『数えることが明確に応用されている場合、個体化は最高の状態にあるに違いない、なぜなら〔数えるために〕我々は1個と2個を区別できなければならないからだ』と考える人⁵²⁾がいたかもしれない。しかし、クワインの明確な個体化原理〔時空基準〕は数えるための方法を与えない。他方、『テーブル』を個体化する明らかに曖昧な別の原理は数える際には役に立つ。出来事や対象のような大きなカテゴリーの中でその項を個体化することと、それらのカテゴリーの中で机や人間のような種を個体化することとは全く別のことなのだ。私はこのことを十分に理解していなかったのである⁵³⁾。」

つまり、デイヴィドソンには「時空基準は出来事を数える基準として役に立たないのではないか」という疑念が実はあったのである。時空基準に対するデイヴィドソンのこの疑念は正当であろう。時空基準は「同じ時空領域を占める」ということを同一性の基準としているだけであって、どこまでが「一つの領域」とみなされるべきかの基準を与えていないからである。本論文第2節で引用したように、クワインにとって、物理的对象（即ち出来事および物体）とは「時空間の任意の部分の物質的内容」であるから、「任意の」時空領域が物理的对象たりうる。したがって、どこまでが「一つの物理的对象」であるかの基準を時空基準は与えない⁵⁴⁾。しか

し、いったん任意の時空領域が与えられたならば、その領域は明確に個体化されている。例えば、私の机を分子の集まりとして見た場合その境界は曖昧である。分子レベルでは境界の候補は何通りもあるだろう。しかし、このことが意味するのは「『机』『私の机』という語の曖昧さであって、『物理的対象』という語の曖昧さではない⁵⁶⁾」。「私の机」の分子レベルでの各候補はそれぞれ明確な境界を持っているからである。クワインのこのような議論に従い、デイヴィドソンは「出来事の同一性」と「数えるための基準」を切り離し、それにより、出来事の位置の曖昧さは時空基準の難点ではないと考えるに至ったのである。即ち、「出来事の同一性の基準は出来事を数える基準として役に立たなくてもよい」と考えるようになったということである。本論文第1節で述べたように「出来事の同一性の基準」はもともと「異なる単称名辞によって指示されている出来事が同一であるための必要十分条件」を与えるためのものであり、「出来事を数えるための基準」を与えるためのものではなかった。「かつては両者を結び付けて考えていたが、切り離しうる。出来事の位置の曖昧さという問題は解決可能だと従来から考えていたが、クワインの指摘を受け、さらに確信が深まった」ということが上の引用部分でデイヴィドソンが言いたいことであろう。

しかしながら、デイヴィドソンの心の哲学における基本的主張である非法則的一元論との整合性を考えると、この問題は解決したと実は言えないのである。本論文第7節(2)「非法則的一元論と時空基準」で検討する。

(4) 4次元主義的存在論の拒否

デイヴィドソンはクワインの時空基準を受け入れるに至るのだが、時空基準の背後にあったクワインの4次元主義的存在論（出来事と物体の同一視）までは受け入れない。本論文第2節(2)で述べたように、クワインの時空基準は彼の4次元主義的存在論から帰結する。しかし、だからといって逆の含意関係があるとは限らないから、デイヴィドソンのこの選択は可能な選択肢である。

クワインが出来事と物体をいずれも4次元の時空連続体として同一視するのに対し、デイヴィドソンは出来事と物体の区別をあくまでも維持しようとする。彼は言う。

「出来事と対象〔物体〕とは、時空間における位置との関係の仕方が異なっているかもしれない。例えば、出来事は或るときに或る場所において生じる (occur) のに対し、対象はいろいろなきにいろいろな場所を占める (occupy) かもしれない。〔…〕波が大洋を横切っていくとき、大洋の観点からすればそれは出来事であるが、波はそれ自体としては対象である。即ち、急速に水を入れ替えつつ共通の形を保ち続ける対象である。〔…〕大洋のうねる動きと大洋を横切っていく波とを同一視することはできない。〔…〕出来事と対象とは、同じ時空間を占めながらも、異なっている。対象は変化を通じて同一の対象のままであり、他方、出来事は対象（または諸対象）における変化である⁵⁶⁾。」

このように、デイヴィドソンにとって、因果基準は放棄できても、出来事と物体の区別は放棄できないものなのである。デイヴィドソンは「かつては、時空基準を受け入れるなら出来事と物体を同一視しなければならなくなると考えていたが、これらは別問題だということをクワインが分かせてくれた」と言う。しかし、クワインの時空基準は4次元主義的存在論からの帰結なのだから、両者が別問題だということをクワインの議論が教えてくれたというのは疑わしい。デイヴィドソンが出来事と物体との区別を維持するのは、むしろ言語に対する彼の考え方

に基づいている。

「時空間は両者〔出来事と物体〕を区別しない。しかし、我々の述語・我々の基本的文法・我々の分類の仕方は両者を区別する。我々の言語に潜在する形而上学（metaphysics implicit in our language）に対する私の興味を前提すれば、この区別を私は放棄したくない⁵⁷⁾。」

デイヴィッドソンによれば、「言語の一般的特徴は世界の客観的特徴を反映している⁵⁸⁾」から、我々の言語と矛盾する4次元主義的存在論を受け入れることはデイヴィッドソンにはできないのである。

7. 転向の是非

(1)時空基準の循環

前節で見たように、デイヴィッドソンはクワインからの批判を受け入れ、自らの因果基準を放棄し、クワインの提案する時空基準を採用するに至った。しかし、クワインによる因果基準批判はどの程度強力なものなのだろうか。

例えば、ルポール⁵⁹⁾は「出来事というカテゴリーは基礎的である。〔…〕基礎的カテゴリーの場合、或る程度の循環は不可避である」と言って因果基準を弁護する。ルポールによれば、物体もまた基礎的カテゴリーであり、その個体化の基準は循環せざるをえない。なぜなら、物体の同一性は時空的連続性の同一性に依存するが、時空的枠組みそれ自体は他の物体の同定（または再同定）によって固定されるからである。

この最後の点は、物体と出来事を同一視して両者を時空的枠組みの中で個体化しようとするクワインへの批判として見ることもできる。即ち、「確かに因果基準は循環しているかもしれない。しかし、時空基準も循環しているではないか。基礎的カテゴリーの場合、循環は不可避なのだ」という批判である。この批判が成り立つか検討しよう。

問題の焦点は、「時空的枠組みの固定化が物理的対象の同定に依存しているか否か」ということである。クワインの言う「物理的対象（物体と出来事）」とは「時空間の任意の部分の物質的内容」のことであった。とすれば、クワインの場合、「時空間の部分」と「時空間の部分の物質的内容」とは区別されている。実際、彼は前者を「時空領域（spatiotemporal regions）」、後者を「そこを満たす素材（stuff that fills them）」と呼んで区別している⁶⁰⁾。もし時空領域がそこを満たす物質的内容と無関係に同定可能なら、時空的枠組みの固定化は物理的対象の同定に依存していない。言い直せば、一切の物理的対象（物体と出来事）が存在せずとも時空領域の同定が可能であるならば、時空基準に関して「循環」はない。その場合、ルポールのような批判を加えることはできない。例えば、時空基準に言う「時空間」がニュートンの絶対時空間であるなら、時空的枠組みはいかなる存在者からも独立に固定化されていることになる。しかし、本論文第2節(2)で見たように、クワインは自らの4次元主義的存在論のメリットとして相対性理論との親近性を挙げており、彼が絶対時空間を想定している可能性はない。では、時空的枠組みはいかにして固定化されるのか。

実は、クワインの言う「時空間」には、指示のための或る枠組みが密輸入されているのではないだろうか。それは「指示する者自身の身体」である。クワインは、「指示対象の発生学」として、人間の身体表面への感覚刺激から出発して物質・物体・クラスなどのカテゴリーが生

成して行く様子を描いている⁶¹⁾。このように、クワインの存在論の出発点には、指示する者自身の身体が密かに置かれている。この身体が言わば暗黙の原点となって指示が行われる⁶²⁾。この暗黙の原点があるおかげで、クワインの場合、何らかの物理的対象に明示的に依拠することなく、かといって、絶対時空間を想定することもなく、時空的枠組の固定性を主張できているのではないだろうか。このように「指示する者自身の身体」という対象を暗黙のうちに同定していることが時空基準を可能にしているのなら、ルポールの言う「循環」批判をクワインが免れることはできないだろう。

(2) 非法則的一元論と時空基準

本論文第1節(2)で述べたように、因果基準のメリットのひとつとして、デイヴィドソンは、「心的出来事と物的出来事の同一性を主張するためには因果基準の方が時空基準よりも優れている」ということを挙げていた。因果基準の放棄に伴い、このメリットの扱いはどうなるのか。デイヴィドソンはかつて次のように言っていた。

「我々が、例えば『或る人が特定の機会に痛みを感じているという出来事と、或る複雑な生理学的出来事とは、同一の出来事である』と主張する場合、〔それらの出来事の同一性の〕最もよい証拠は、〔…〕その痛みがその生理学的変化と同じ原因・結果を持っていることの証拠になるようなものである。このようなケースに関して、原因・結果の同一性は場所・時間の同一性よりもはるかに有用な基準であるように思われる⁶³⁾。」

デイヴィドソンの心の哲学は「非法則的一元論 (anomalous monism)」と自ら名付けている⁶⁴⁾立場であるが、それは、(個体としての) 心的出来事と物的出来事の同一性を主張する立場である。例えば、今、私が指先に痛みを感じていましょう。このとき、私による痛みの知覚というこの心的出来事と、そのとき私の身体内で生じている何らかの生理学的変化(物的出来事)とは、同一の出来事である、というのが、デイヴィドソンの主張である⁶⁵⁾。即ち、同じ一つの出来事が、一方では心的出来事として記述され、他方では物的出来事として記述されている、というのである。

心的出来事と物的出来事のこのような同一性を主張する際に時空基準よりも因果基準の方が優れているとデイヴィドソンが考えたのはなぜだろうか。それは、心的出来事の位置の同定の難しさの故であろう。私が指先に痛みを感じている場合、この「痛みの知覚」という心的出来事が生じている場所はどこなのか。「指先」か。しかし、生理学の教えるところによれば、指先から腕の中の神経を通り私の脳に至る一連のプロセスの結果、私は痛みを知覚しているはずだ。とすれば、ここで生じている生理学的変化は「指先・腕・脳」全体で生じているのだから、「指先」だけで生じている痛みの知覚とは、占めている時空領域が異なる。それゆえ、時空基準を採ると、これら二つの出来事は同一ではないことになる。では、この痛みの知覚は「指先」ではなく「指先・腕・脳」全体で生じているのか。しかし、痛みの知覚という心的出来事が「指先・腕・脳」という身体のこの部分で生じている、とはいかなる意味なのか。そもそも、「対応する生理学的出来事の占める時空領域」の同定から独立に「心的出来事の占める時空領域」を同定することはいかにして可能なのか⁶⁶⁾。この問いに答えるのは容易ではない。これに対し、因果関係に着目すれば、「指先の痛みの知覚」と「指先から腕の中の神経を通り私の脳に至る一連の生理学的変化」は、どちらも(例えば)「私の指にナイフが刺さった」という共通の出来事を原因としている。そして、因果基準によれば、その他の原因や結果もすべて同じ場合、

この二つの出来事は同一である。要するに、因果基準を採れば、「心的出来事の位置の同定」という難問が生じないのである。デイヴィドソンが、「心的出来事と物的出来事の同一性を主張する場合、因果規準の方が優れている」と考えたのはこのような理由からであろう。

しかし、デイヴィドソンは因果基準を放棄した。では、時空基準を採った場合、非法則的一元論のもとで、心的出来事と物的出来事の同一性はいかにして確保されるのか。

確かに、日常生活においては、心的出来事の位置は「その出来事が生じている人のいる場所において生じている」という程度の位置付けで足りている⁶⁷⁾。例えば、我々の普段の生活において、私の心の中で生じるどんな出来事も私のいる場所（即ち私の身体のある場所）の内で生じていると我々は見なしているであろう。本論文第4節(1)で述べたように、デイヴィドソンは「痛みのようないくつかの疑わしいケースを別にすれば、人を同定する以上の正確さで心的出来事を位置づけるべき理由はない⁶⁸⁾」と言う。しかし、非法則的一元論との整合性を考慮に入れると、心的出来事の位置を「人の位置」という曖昧な位置にしておくことは不可能なはずである。

なぜなら、「時空基準」と「非法則的一元論」という組み合わせのもとでは、「あらゆる心的出来事の占める時空領域は人の占める時空領域と同じだ」ということから「あらゆる生理学的出来事の占める時空領域は人の占める時空領域と同じだ」ということが帰結するからである。本論文第6節(1)で述べたように、「セバスチャンのガム噛み」という出来事と「セバスチャンの歩行」という出来事とは、時空基準によれば、全く同一の出来事であるが、同様に、私がうきうきした気分である計算をしていた場合、この「気分」と「計算」とは同一の心的出来事である。なぜなら、どちらの心的出来事も、同じ私という人の占める時空領域を占めているからである。要するに、時空基準によれば、「同じ時間に一人の人に生じる心的出来事はたかだか一つしかない」ということが帰結する。それゆえ、そのような心的出来事と「同一」である生理学的出来事もまた、「同じ時間に一人の人にたかだか一つしか生じない」ということが帰結する。このように、非法則的一元論のもとで時空基準を採ると、「あらゆる生理学的出来事の占める時空領域は人の占める時空領域と同じだ」ということになるのである。しかし、これは生理学的出来事を身体のさまざまな部分に区分して同定している今日の生理学における出来事概念とは随分異なっている。

無論、本論文第6節(2)で述べたデイヴィドソンの単称因果言明の分析によれば、同じ時間に一人の人にたかだか一つしか生じないような生理学的出来事自体が何らかの因果法則（例えば生理学的法則）を例化するものである必要はない。その出来事に何か別の記述が存在し、その記述が因果法則を例化していればよい。デイヴィドソンによれば、「出来事それ自体」と「出来事の記述」とは区別されるべきであり、「因果関係」に関わるのが前者であるのに対し「因果法則」に関わるのは後者だからである⁶⁹⁾。しかし、たとえ記述の仕方が異なると、そこで再記述されているのは「同一」の出来事でなければならない。（別の出来事なら「再記述」とは言えない。）とすれば、人という曖昧な位置しか持たない生理学的出来事の記述の仕方をどのように変えようと、その出来事の位置は変わりえない。なぜなら、時空基準によれば、時空的位置の異なる出来事は別の出来事だからである。

結局、非法則的一元論を維持しつつ、時空基準を採ると、今日の生理学におけるような細分化された出来事の同定は放棄しなければならなくなる。このように、デイヴィドソンの非法則的一元論と時空基準とは相性が悪いのである。

上述のように、確かに因果基準は「循環」（第5節）および「単称因果言明分析との相性の悪さ」（第6節(2)）という難点を抱えている。しかし、本節での検討によって、他方、時空基準にも難点があることが明らかになった。即ち、「循環（或いは、指示の暗黙の原点としての身体）」（本節(1)）および「非法則的一元論との相性の悪さ」（本節(2)）という難点である。したがって、デイヴィドソンの「因果基準の放棄・時空基準の採用」という決断は早計過ぎたと言わざるを得ない。彼は他の選択肢も探るべきであった。

おわりに

因果基準や時空基準以外の同一性基準として、例えばブランド⁷⁰⁾は時空基準を様相概念によって修正し、「出来事が同一であるのは、それらが全く同じ時空領域を必然的に占める場合（だけ）である」という基準を提案している。この基準によれば、本論文第3節「微妙なケース」(b)の「或る男による口笛吹き」と「或る男によるバス停までの歩行」とは同一の時空領域を占めているが、必然的に占めるとは限らない（口笛を吹くことなしにバス停まで歩くことは可能である）から、別々の出来事だということになる。また、(c)の「球の回転」と「球の温度上昇」も同様に別々の出来事だということになる。

他方、キム⁷¹⁾は、出来事とは「或る時間における、実体（substance）による、性質（property）の例化（exemplification）」であり、「出来事が同一であるのは、時間・実体・性質が同じ場合（だけ）である」というまったく別の基準（「性質例化基準」と呼ぼう）を提案している。性質例化基準によると、本論文第3節「微妙なケース」の(b)(c)はもちろん、(a)の「私によるタンクへの毒薬の混入」と「私による宇宙飛行士の殺害」も異なる出来事だということになる。というのは、「毒薬の混入」と「殺害」とは異なる「性質」だからである。

出来事の同一性については、因果論や行為論との関連のもと、現在も活発に論じられている。が、その多様な展開については稿を改めて論じることにしたい。

注

1) その議論の概略は次のとおりである。

まず、「副詞除去推論」([Davidson 1969, pp.166-167])について説明する。日常言語において、「セバスチャンは午前2時にボローニヤの通りを散歩した」という文から「セバスチャンはボローニヤの通りを散歩した」という文を推論することができる。前者の文から「午前2時に」という副詞句を除去すると後者の文が導かれる。これが「副詞除去推論」である。しかし、1階述語論理に含まれる語彙は個体記号・述語記号・量化記号・論理結合子の4種類(関数記号と命題記号を入れても6種類)だけであり、副詞に相当する語彙は含まれていない。そこで1階述語論理の範囲内でこの推論の妥当性を示すためにデイヴィドソンが採った方法は、「個体としての出来事」の存在を認め、この存在者への述語として副詞を解釈することであった。即ち、前者の文を「或る出来事 x が存在し、セバスチャンは x を散歩し、 x はボローニヤの通りで生じ、 x は午前2時に生じていた」という存在文に書き換える。この存在文において、「午前2時に」という副詞句は「出来事 x 」を修飾する述語「……は午前2時に生じていた」として読み直される。すると、後者の文は前者の文から連言除去によって導くことができる。(連言除去とは「 A かつ B 」から「 A 」を導く推論である。)なお、「セバスチャンは散歩した」を「或る出来事 x が存在し、セバスチャンは x を散歩した」と書く点については[Davidson 1967a, especially pp.118-119]を参照せよ。

次に、「行為の再記述」([Davidson 1967a, pp.109-110])について説明する。例えば、「引き金を引いた」「被害者を撃った」「自分の身を守った」、これらが一つの出来事の再記述である場合がある。行為の評価が可能であるためには、一つの行為に複数の記述が存在しうることが必要である。私が被害者を撃ったことは非難されるべきだが、私が自分の身を守ったことは弁護されうる。そして、両者が同一の出来事の記述であるが故に、前者の行為も弁護されうる。行為の再記述が可能であることによって行為のこのような評価が可能になる。(なお、ここには「デイヴィドソンのように、行為を出来事として捉えてよいのか」という問題があるが、この点については留保する。)

以上のように、「副詞除去推論」と「行為の再記述」の二つが「個体としての出来事」の存在をデイヴィドソンが主張する主な理由である。

ただし、私自身は、日常言語における推論を1階述語論理の範囲内で処理することは、それができに越したことはないが、デイヴィドソンが考えているほど絶対的な要請だとは思わない。一般的に言って、論理学は哲学にとって有効な道具だが、道具に合わせて対象をどこまで変形するかは、それによって得られるものと失なわれるものとを比較考量して決められるべきである。

2) 例えば, [Quine 1975, p.102].

3) デイヴィドソン ([Davidson 1967b, p.124])はこの原則に従うことを明記する。ちなみにデイヴィドソンはクワインの弟子である。

4) [Davidson 1969, p.179].

5) [Davidson 1969, p.231].

6) [Davidson 1969, pp.164, 173, 177, 178].

7) 厳密には、「個体変項 x と置き換えられた単称名辞によって指示される出来事」と書くべきだが、誤解のおそれはないと思われるので、本文のように書いた。

8) [Davidson 1969, p.172].

9) [Davidson 1969, p.177]. また、デイヴィドソン ([Davidson 1963, p.4]) は次のように言う。「私はスイッチをはじめて明かりをつけ、部屋を明るくする。そして自分では気づいていないが、空き巣ねらいに対して私が在宅していると警告する。ここで私は4つのことをする必要はない。一つのことだけをすればよい。その一つのことには4つの記述が与えられたのである。」

10) [Davidson 1969, p.165].

- 11) [Davidson 1969, p.179]。
- 12) [Davidson 1969, p.179]。ただし、デイヴィドソンは同じ箇所で「時空的位置の同一性はもう一つのそのような条件かもしれない」と留保を付けている。
- 13) [Davidson 1969, p.179]。
- 14) [Davidson 1969, p.178]。
- 15) [Davidson 1969, p.179]。
- 16) [Quine 1985, p.167]。なお、クワインによるデイヴィドソンへの批判については本論文第5節で述べる。
- 17) [Quine 1976, p.260]。ただし、クワイン ([Quine 1985, p.167]) も言うように、口笛吹きと歩行とが体の別々の部分を用いてなされるとするなら、これらは別々の出来事である。
- 18) 本論文の「はじめに」および注1で述べたように、副詞除去推論を扱うときのデイヴィドソンもまったく同じ動機を持っている。
- 19) [Quine 1960, p.170]。
- 20) [Quine 1960, p.171]。
- 21) (i)~(iv)は[Quine 1960, pp.171-172]で、(v)(vi)は[Quine 1970, p.31]で述べられている。
- 22) [Newton-Smith 1980, pp.186-187]。
- 23) ただし、クワインは具体的存在者である物理的対象の他に、クラスという抽象的存在者の存在も認めている。(したがって、クワインは唯名論者ではない。)
- 24) [Quine 1985, p.167]。
- 25) (a)は[Davidson 1969, p.177]、(b)は[Quine 1976, p.260]、(c)は[Davidson 1969, p.178]から引いた。
- 26) [Quine 1985, pp.166-168]。
- 27) [Lemmon 1967, pp.96-103]。
- 28) [Davidson 1967b, pp.124-125]。
- 29) [Davidson 1969, pp.175-177]。
- 30) しかし、心的出来事と物的出来事との同一性 (例えば痛みと脳内の電気的・化学的反応の同一性) を主張しようとする場合、時空基準を用いようとするれば、はるかに細かい位置指定が必要になるのではないか。この点については本論文第7節(2)で再度触れる。
- 31) [Davidson 1967b, p.125]、[Davidson 1969, pp.178-179]。
- 32) [Davidson 1969, p.178]。
- 33) [Quine 1985, p.166]。
- 34) 「ラッセルのパラドックス」とは集合に関する次のようなパラドックスである。

集合には「自分自身を要素に持つ集合 (即ち自分自身に属する集合)」と「自分自身を要素に持たない集合 (即ち自分自身に属さない集合)」とがある。例えば、「すべてのライオンからなる集合」それ自体はライオンではないから、この集合は自分自身を要素に持たない。他方、「ライオンでないものすべてからなる集合」はそれ自体「ライオンではないもの」だから、この集合は自分自身を要素に持つ。

今、前者のような集合 (即ち自分自身を要素に持たない集合) すべてを集めて集合Aを作ったとする。さて、この集合Aは自分自身を要素に持つか、それとも持たないか。(i)もし持つなら、集合Aは「自分自身を要素に持たない集合」ではないことになるから、(定義により) 集合Aに属さないはずだ、即ち、集合Aは自分自身を要素に持たないはずだ。このように、持つとすれば持たないことになるという矛盾が生じる。(ii)他方、持たないとすると、集合Aは「自分自身を要素に持たない集合」だということになるから、(定義により) 集合Aに属するはずだ、即ち、集合Aは自分自身を要素に持つはずだ。このように、持たないとすれば持つことになるという矛盾が生じる。結局、集

合Aが自分自身を要素に持つと仮定しても持たないと仮定しても矛盾が生じる。これが「ラッセルのパラドックス」である。

集合A（自分自身を要素に持たない集合すべてからなる集合）は、すべての集合についてそれらが「自分自身を要素に持つ」か否かを確定することによって初めてその要素が確定するような集合であるが、その際、「すべての集合」の中には当然集合A自身も含まれている。つまり、集合Aの定義は非述語的定義である。集合Aのようなパラドックスを引き起こす集合が生まれないようにするために、ポアンカレやラッセルは非述語的定義を禁止したのである。

しかしながら、この禁止はパラドックス回避の手段としては強すぎる。「自分自身を要素に持つ集合すべてからなる集合B」を作った場合、集合Bは非述語的に定義されているが、パラドックスを引き起こさない。というのは、(i)集合Bが自分自身を要素に持つとするなら、集合Bは（定義により）集合Bに属することになり、(ii)他方、集合Bが自分自身を要素に持たないとするなら、集合Bは「自分自身を要素に持つ集合」ではないことになるから、集合Bは（定義により）集合Bに属さないことになる。結局、(i)(ii)いずれであっても矛盾は生じないからである。

- 35) クワイン ([Quine 1985, p.166]) が「このことを私はかつて述べたことがある」と言っているのは、例えば[Quine 1963, p.243]のことである。
- 36) ただし、この書き換えを1階述語論理の中で「(z)」を含まないように行うのは困難である。
- 37) [Lombard 1998, pp.286-287]。
- 38) eの原因はcひとつだけとは限らず、また、cの結果はeひとつだけとは限らないが、そのことはここでの議論に影響しない。
- 39) なお、単称因果言明に関するデイヴィッドソンの分析 ([Davidson 1963, p.16]) によれば、「出来事cが出来事eの原因である」と言えるためには、cやeの再記述（これをそれぞれ γ と ϵ としよう）が存在し、「 γ が ϵ を引き起こした」という文が真なる因果法則から帰結しなければならない。しかし、出来事の再記述が可能であるためには、出来事の同一性が成立していなければならない。結局、「出来事の同一性に関する因果基準」は「出来事の再記述」を必要とし、「出来事の再記述」は「出来事の同一性」を必要とする。このような「循環」が生じていると言うこともできる。
- 細部の違いを除けばタイトルズ ([Tiles 1976, p.187]) もこのような趣旨の因果基準批判をしている。
- 40) [Quine 1985, p.167]。
- 41) [Quine 1976, p.260]。
- 42) [Davidson 1985, p.175]。
- 43) [Davidson 1969, p.179]。
- 44) [Davidson 1967c, pp.155-156]。
- 45) [Davidson 1967c, p.155]。
- 46) [Davidson 1970, p.215]。
- 47) 例えば[Sanford 1985, p.283]。
- 48) 厳密に言えば、この単称因果言明(α)自体は真であってもよい。しかし、その場合、今度は、例えば、「この球の回転が周囲の磁場を変化させた」と「この球の温度上昇が周囲の磁場を変化させた」という単称因果言明が異なる真理値を持たなければならない。そして、そのためには再び「この球の回転」と「この球の温度上昇」とが異なる出来事でなければならない。
- 49) これも因果基準の引き起こす「循環」の一つである。
- 50) [Davidson 1985, p.175]。
- 51) [Davidson 1969, p.176] のことである。また、本論文第4節の(1)も参照せよ。
- 52) これはデイヴィッドソン自身のことである。彼は [Davidson 1969, p.180] で「個体化が最もよくなされているなら、数えるための原理を与えるような種 (sorts or kinds) がなければならない」と言っている。

- 53) [Davidson 1985, p.176]。
- 54) [Hookway 1988, pp.101-102] を参照せよ。
- 55) [Quine 1985, p.168]。
- 56) [Davidson 1985, p.176]。
- 57) [Davidson 1985, p.176]。
- 58) [Davidson 1977, p.213]。また、デイヴィドソン ([Davidson 1977, p.199]) は「形而上学を追究する一つの方法は、我々の言語の一般的構造を研究することだ」と言う。
- 59) [Lepore 1985, p.161]。
- 60) [Quine 1985, p.167]。
- 61) [Quine 1960, ch.3]。
- 62) [野本 1997, pp.259-260] によれば、「今」「ここ」といった指標的副詞による「場」の特定化は「身体を持つ話し手」という個体に依存している。
- 63) [Davidson 1969, p.179]。
- 64) [Davidson 1970, p.214]。
- 65) ただし、ここで主張されている同一性はあくまでも「個体としての出来事」の同一性であり、「指先の痛みの知覚というタイプの心的出来事が生じる際には常に或る特定のタイプの生理学的変化が生じているはずだ」ということをデイヴィドソンが主張しているわけではない。つまり、デイヴィドソンの主張はトークン同一説であって、タイプ同一説ではない。
- 66) 「心的出来事の占める時空領域」の同定は「対応する物的出来事の占める時空領域」の同定から独立に可能でなければならない。さもなくば、時空基準に基づいてこれらの出来事の同一性を主張することは単なる同語反復になってしまう。
- 67) このことは [Davidson 1970, p.214] において既に言われている。
- 68) [Davidson 1969, p.176]。
- 69) [Davidson 1970, p.215]。
- 70) [Brand 1976, p.149]。
- 71) [Kim 1976, pp.160-161]。

文献表

- Brand, M. (1976), "Particulars, Events, and Actions," in M. Brand and D. Walton (eds.), *Action Theory*, Reidel, pp.133-157.
- Davidson, D. (1963), "Actions, Reasons and Causes," *The Journal of Philosophy*, vol.60, pp.685-700; reprinted in Davidson (1980), pp.3-19.
- Davidson, D. (1967a), "The Logical Form of Action Sentences," in N. Rescher (ed.), *The Logic of Decision and Action*, University of Pittsburgh Press, pp.81-95; reprinted in Davidson (1980), pp.105-122.
- Davidson, D. (1967b), "Reply to Lemmon on Identity Conditions for Events," in N. Rescher (ed.), *The Logic of Decision and Action*, University of Pittsburgh Press, pp.116-117; reprinted in Davidson (1980), pp.124-125.
- Davidson, D. (1967c), "Causal Relations," *The Journal of Philosophy*, vol.64, pp.691-703; reprinted in Davidson (1980), pp.149-162.
- Davidson, D. (1969), "The Individuation of Events," in N. Rescher (ed.), *Essays in Honor of Carl G. Hempel*, Reidel, pp.216-234; reprinted in Davidson (1980), pp.163-180.
- Davidson, D. (1970), "Mental Events," in L. Foster and J. W. Swanson (eds.), *Experience and Theory*, University of Massachusetts Press, pp.79-101; reprinted in Davidson (1980), pp.207-227.
- Davidson, D. (1977), "The Method of Truth in Metaphysics," in P. A. French and T. E. Uehling, jr. and H. K. Wettstein (eds.), *Contemporary Perspectives in the Philosophy of Language*, University of Minnesota Press, pp.294-304; reprinted in D. Davidson, *Inquiries into Truth and Interpretation*, Clarendon Press, 1984, pp.199-214.
- Davidson, D. (1980), *Essays on Actions and Events*, Clarendon Press.
- Davidson, D. (1985), "Reply to Quine on Events," in LePore and McLaughlin (1985), pp.172-176.
- Hookway, C. (1988), *Quine; Language, Experience and Reality*, Stanford University Press.
- Kim, J. (1976), "Events as Property Exemplifications," in M. Brand and D. Walton (eds.), *Action Theory*, Reidel, pp.159-177.
- Lemmon, E. J. (1967), "Comments on D. Davidson's 'The Logical Form of Action Sentences,'" in N. Rescher (ed.), *The Logic of Decision and Action*, University of Pittsburgh Press, pp.96-103.
- LePore, E. (1985), "The Semantics of Action, Event, and Singular Causal Sentences," in LePore and McLaughlin (1985), pp.151-161.
- LePore, E. and McLaughlin, B. (1985), *Actions and Events: Perspectives on the Philosophy of Donald Davidson*, Basil Blackwell.
- Lombard, L. B. (1998), "Ontologies of Events," in S. Laurence and C. Macdonald (eds.), *Contemporary Readings in the Foundations of Metaphysics*, Basil Blackwell, pp.277-294.
- Newton-Smith, W. H. (1980), *The Structure of Time*, Routledge & Kegan Paul.
- 野本和幸 (1997), 『意味と世界：言語哲学論考』法政大学出版局。
- Quine, W. V. (1960), *Word and Object*, The MIT Press.
- Quine, W. V. (1963), *Set Theory and Its Logic*, Harvard University Press.
- Quine, W. V. (1970), *Philosophy of Logic*, 1986, Harvard University Press.
- Quine, W. V. (1975), "On the Individuation of Attributes," in *Theories and Things*, Harvard

University Press, 1981, pp.100-112.

Quine, W. V. (1976), "On Multiplying Entities," in *The Ways of Paradox and Other Essays, revised and enlarged edition*, Harvard University Press, pp.259-264.

Quine, W. V. (1985), "Events and Reification," in LePore and McLaughlin (1985), pp.162-171.

Sanford, D. H. (1985), "Causal Relata," in LePore and McLaughlin (1985), pp.282-293.

Tiles, J. E. (1976), "Davidson's Criterion of Event Identity," *Analysis*, vol.36, No.4, pp.185-187.

(2005年4月27日受理)